



TITLE:

彗星だより

AUTHOR(S):

CITATION:

彗星だより. 天界 1928, 8(86): 233-236

ISSUE DATE:

1928-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161275>

RIGHT:

彗星だより

1928年 a 彗星 本年最初の彗星はハイデルベルヒのラインムート氏によつて発見せられた。その2月22日萬國時23時4.7分に於ける位置は次の通りで

赤徑 $9^h 15^m 7.5$ 赤緯 $+21^\circ 44' 55''$ (1928.0)

日運動は夫々 $-20^\circ, +7'$ であることが報ぜられた。當時の光級は $12.^m 5$ であつた。本年の彗星発見は昨年 of プラスワイト又一昨年 of バードなぎに比べると餘程をそかつた譯である。其後方々の觀測があるが、クロンメルン氏は発見前の1月29日の寫眞位置、2月22日及び25日の觀測から次の様な橢圓軌道を算出した。

近日點通過時	T	1928年2月1.650萬國時	
近日點引數	ω	$9^\circ 26' 37''$	} 1928.0
昇交點黃徑	Ω	124 53 11	
傾斜角	i	8 0 16	
離心角	φ	30 2 13	
近日距離の對數	Log q	0.268589	
周期		7.16411年	

アメリカ、パークレイ天文臺のバーマン、ホイブル兩氏が算出した略算の軌道要素も大體に於て似てゐる。

1928 b 彗星 4月16日着の國際天文同盟回報によるゴジャコビニ氏が新彗星を発見した由である。即ち3月17日發見で萬國時22時14.0分に於ける位置は赤經 $5^h 50^m 0^s$ 赤緯 $+14^\circ 35'$ で暫くの間見えた丈で再び觀測し得ないから、その運動もしかもわからないけれども赤緯が著しく減じてゐたといふことである。當時の光級は11.0等級だつた。

彗星の名稱 前回の彗星だよりの1927 k 彗星の紹介のところで當然述べる筈であつたのはこの彗星の呼び方に關してである。彗星の一般的な記號方法は、先づその軌道を研究した上でその近日點通過の時日の順序に並べ

るを、幾つかの彗星が一つの暦年の中に含まれることになるであらう。その順序をローマ数字で表はしたものを年の次に書き加へて彗星の名稱とするのである。1925 I, 1926 II…といった様なものである。しかし乍ら彗星は近日點通過の順序には無關係に發見せられることだから、この様な記號をつけるためにはその年の終るまで待たねばならない。或はその後に發見せられたものでも尙ほ早く近日點を通過したものもあるから餘程後まで待たねば決定的な記號を與へられぬ譯である。そんなことでは彗星の名稱としては甚だ迂遠なところから彗星に限つて別にその發見者の名前で呼ばれるのである。

この發見者の名前で呼ぶことは大層親しみ易い、良い名付け法ではあるが彗星發見をする人は殆んど専門的に引續いて多くの彗星を發見してそれが爲めに同一の名前では甚だしく紛らはしい場合が屢合出てくるのである。それで最も簡單な方法としてその一年中で最初に發見せられたものから順序に a, b, c, …… といふ假りの名前がつけられてゐるのである。このことは恐らく多くの讀者は承知のことと考へる。

こゝで問題となるのは a, b, c, …… といふ規約である。といふのは獨逸では、尙詳しく申せばドイツの天文彙報（アストロノミツシエ・ナハリヒテン）では a, b, c, d, e, f, g, h, i, k, l, の順序をとり英國流では即ちクロンメリン老一派の人人では a, b, c, d, e, f, g, h, i, k, …… の文字を採用してゐることである。その依つて來ることを考ふるに、もともと獨逸では J は半母音で I と紛れ易い心配があるので順序を示す場合に片方を除外した例が多いのである。例へば獨逸の計算局（Rechen-Institut）では小遊星の暫定記號として大文字のアルファベットを使用するがその場合に I を除外して J のみを使用してゐる。即ち一つの例を挙げれば 1902 HZ Genua の次に發見せられたのは 1902 IA でなくて 1902 JA となつてゐる様なものである。しかるに又同じく獨逸の天文協會（Astronomische Gesellschaft）ではその四半年報（Vierterjahreschrift）に發表する變光星の名稱として同じく A, B, C を使用するがこれには I を用ひて J を用ゐない。この様な國柄では彗星の記號に i のみを用ゐて j を用ゐないことも幾分首肯しうるのであるが英國流

に *j* のみを使用することは一寸合點のゆかぬところである。只一つ獨逸側との調和をいふ點にあるならば潔ぎよく *j* をすてて *i* を採用すべきであると思ふのである。昨年1927中第九番目に發見のシュワスマン・ワハマン彗星の報導に際して英國のマートン氏は B.A.A 回報中に「この彗星は 1927 *j* とすべきもので、習慣上 *i* は用ゐないことになつてゐる」と斷り書きがしてあるが、實に憐むべき習慣である。

moreover, この様な問題は一年中に發見の彗星が 9 つ或は 10 以上に達した場合に起るこゝ柄であるが昔は左程多くの彗星は毎年發見せられなかつた。開闢以來初めてそんな多數の彗星の發見があつたのは 1898 年でペラインが彗星發見のため氣張つてゐた頃の所産である。

さてその年の記號の附けぶりを調べて見るに、獨逸の天文彙報ではその年まで *a, b, c* の名前は附けずに只發見者の名前で呼んでゐたのであるが、この年のそんな多數の發見に驚いて發見電報の中央局長であり又彙報出版者であるキールのクロイツ臺長は今後即ち 1899 年以向は前に定めてあつた通りに（それは同彙報の第 101 卷に出てゐるこのことだが、當天文臺にないため未調査である）*a, b, c, …… i, j* の暫定名稱を附けることを申出してゐるのである。それは 1898 年 11 月 28 日附になつてゐる。

ところが英國ではさうかと思ふに、英國天文協會(B.A.A.)ではその機關雜誌に「1898 年 10 月 20 日ブルツクスによつて大彗星(*i* 1898)發見せらる」と立派に *i* 文字を使つてゐる其上次に 11 月 14 日チエーズによつて發見せられた彗星には *j* 1898 の名前を與えてゐるのである。一方アメリカの通俗天文誌 (Popular Astronomy) も *a, b, c, …… i, j* の名前を歴然とつけてゐるのを見出だすのである。

この曠古の彗星の豐年は大した問題にならず過ぎ去つて終つて、再び珍しい彗星年 1925 年が来るまで世紀の三分の一を經過したのである。

1925 年の多數の彗星發見は今も耳新しいところと思はれるが、此年以來名前の附け方が別別に定まつた様である。ドイツの天文彙報では *a, b, c, d, e, f, g, h, i, k, l* の 11 文字を使用してゐるに對して、英、米では *i* を *j* に置き換へてゐるのである。これが所謂習慣なのであつて再び昨年 1927 年の場合に

同様に用ゐられたのである。

さて日本に於ける習慣はさうであらうか。遺憾ながら貴ぶべき傳統を持ち合はさないのであるから、1925年の時には彗星発見の通知がある毎に a,b,c,……, をいろは同様に心得て一つ一つに配當したのである。即ち…… h,i,j,k,l ミ當てがつて最後の帳尻はうまく合つてゐた。さいふのはバラバシエフさいふ彗星が一つ割り込んでゐたが爲めである。このバラバシエフ彗星はロシア、カルコフのバラバシエフ教授が1925年10月9日に発見したもので、ラヂヲで放送されたものが日本に傳へられたのである。それで我々はこれを1925h 彗星の名前を與へてすましてゐたのである。しかし生憎この彗星は他では発見せられなかつたので、次に10月20日バーデによつて発見せられたファイユ彗星に h 記號を譲つて終つたものである。尤もバラバエフ教授の云ふには最初寫眞で 5.^m5 位のものとして発見したので直に望遠鏡でこれを檢し且つ幾人かに見せたさいふのである。雙眼鏡でも又肉眼でも後に見たさいふのだから勿論幻影でないことは事實であるがその後の觀測がないために彗星であるさいふこそが確かめられないのである。さいつて直ぐ h の記號をお次へ順送りするのも一寸解し難いところである。これが彗星でないか決まれば h を抹殺すればいい丈の話で今までにもその例はある。例へば1908年 a 彗星は Amherstia さいふ小遊星を間違へてゐたので、事實上 a 彗星であるべきウドゲートの発見したエンケ彗星は1908b ミなつてゐる様なものである。

尤も今年の a 彗星の如く、フリボフ氏が間違ひで取り消した以上はこんど発見せられた彗星ラインムートに名前を譲るべきであることは勿論の話である。

それは兎も角もとして、今後彗星の発見は増加しても減する筈もないのだから屢屢 i ミ j ミの別々な用ひ方が繰返へさるものを見なければならぬ。この様な問題は國際天文同盟 (International Astronomical Union) に提出して決定すべきものであらう。そして別段 i ミ j ミがそれ程間違ひ易いものとも思へぬから、…… h,i,j,k,l,m……ミ使用する様にすれば雙方の顔を立てるさいふものであらう。(1928 4 20上田)